

非抗ウイルス薬による肝癌抑制のエビデンス

2 嗜好品や食品による肝発癌抑制の可能性

鳥取大学医学部健康政策医学分野教授

黒沢 洋一

KEYWORDS

肝細胞癌予防

prevention of hepatoma

食事因子 (dietary factor)

タバコ (tobacco)

アルコール (alcohol)

コーヒー (coffee)

Samary

最近、肝細胞癌と肥満、糖尿病、非アルコール性脂肪性肝疾患との関連が注目され、生活習慣である嗜好品や食事による肝細胞癌の予防、代替療法の可能性を示す疫学的エビデンスが蓄積されている。生活習慣病の危険因子として知られる、タバコ、アルコールは肝細胞癌においても重要な危険因子である。ほかの嗜好品では、コーヒーを飲むことと肝細胞癌の死亡リスク減少との関連が示されている。コーヒーは、肝細胞癌だけでなく、非アルコール性脂肪性肝疾患、肝硬変の減少との関連も報告されコーヒーの「肝臓保護作用」として注目されている。肝発癌抑制の機序として、コーヒーの抗酸化、抗炎症、抗線維化作用が推測されている。食事因子としては、野菜の摂取が肝細胞癌の死亡リスクの低下に関連すると考えられている。カビ毒のアフラトキシンによる食品汚染は、肝細胞癌のリスクファクターであり、規制値が定められている。

はじめに

肝細胞癌は、世界的には6番目に多い癌であり、死亡数で見ると全癌中2番目に多い¹⁾。わが国でも、癌の部位別死亡数で5番目に多い癌である²⁾。主たるリスクファクターはB型およびC型肝炎である。わが国は、肝細胞癌患者に占めるC型肝炎の割合が多く、1971年には肝癌患者の70%に既往がみられたが、その後は漸減している³⁾。最近、肝細胞癌と肥満、糖尿病、非アルコール性脂肪性肝疾患 (nonalcoholic fatty liver disease : NAFLD) との関連が注目されており、ウイルス以外の生活習慣に関するリスクファクターにも関心が寄せられている⁴⁾。ここでは、嗜好品や食品による肝発癌抑

制の可能性について述べる。

嗜好品

1. 喫煙

喫煙は、癌をはじめとする生活習慣病における最大のリスクファクターである。肝細胞癌においてもリスクファクターであり、タバコの成分が肝臓で代謝されるとき、発癌のイニシエーション、プロモーションとして作用すると考えられている⁵⁾。シンガポールのコホート研究⁶⁾では、アルコールなどの交絡因子を調整した喫煙者の非喫煙者に対する肝細胞癌罹患のハザード比は1.63 (95% CI:1.27-2.10)と報告している。つまり、喫煙者は、非喫煙者に比較して肝細胞癌の罹患リスクが1.6倍

に上昇することを示している。また、肝細胞癌患者の外科的手術後の喫煙の影響を調べた研究では、手術後も喫煙を続ける人は、禁煙した人に比較して生存率の低下がみられる⁷⁾。いずれにせよ、肝細胞癌の予防に、禁煙が重要であることは言うまでもない。

2. アルコール

アルコールは、肝臓などにおける発癌物質と考えられている⁸⁾。19のコホート研究 (4,445例の肝細胞癌患者と5,550例の肝細胞癌死亡) が含まれるメタアナリシス⁹⁾では、一日エタノール37.5g未満の飲酒者およびそれ以上の飲酒者は非飲酒者に比較して、相対危険度がそれぞれ0.91 (0.81-1.02) と1.16 (1.01-1.34) で